

巻頭言

水と空気はタダ？

総合情報基盤センター杉谷キャンパス業務主任 笹野 一洋
(杉谷キャンパス数学教室 教授)

気が付けば、年齢を年単位ではなく(半)世紀単位で数えられるようになってしまっていて久しい。すっかりジジイになってしまった訳である。で、ジジイの特権で「昔話」から拙文を始めたいと思う。

もう 20 年以上も前のことになろうか。ようやくパソコン(という言葉自体が既に死語?)が普及してきたもののワープロに毛が生えたモノくらいにしか認識されず、研究に使えるのは計算機室に鎮座する計算機しかないと考えられていた頃、ネットワークの重要性に対する学内の理解は殆ど得られなかった。その頃既に遥か遠くの出身大学のコンピューターにアカウントを取得し、自宅からモデムで接続して e-mail を利用していた筆者は、ネットワークを学内にも整備して Internet(当時はまだ junet とするべきか)に接続すべきだと考えていたが、研究用計算機以外への投資に価値を認めない或る教授から「コンピューター・マニアの道楽」と罵倒されたような記憶がある。

そして時は過ぎ、今やネットワーク無しには教育・研究・業務の何れもが成立しなくなってしまった。ネットワークが停止すれば、たとえそれが予告された停止であっても、「論文の締切が今日なのにメールが送れない。どうしてくれる？」というような見当違いのクレームまで舞い込んでくるようにすらなった。ネットワークが、贅沢品のような特殊な存在から、上下水道のような「在って当たり前」の物に変化したとも言えるだろう。

このような劇的な変化が起こった理由としては、世の中全体がそのように変化したということが挙げられるだろうが、国立大学に関しては、文部省(当時)の「ネットワークを導入するのならば予算を付けてあげるよ」という誘導が大きなきっかけとなっていたと思う。「よく解らないけれど、手を挙げておかないと損」という気持ちからネットワークを導入した大学も多いのではないだろうか。さらにその後も数年に一度、ネットワーク機器の更新のための概算要求は比較的容易に認められてきた。

しかし、国家財政の逼迫に伴って国立大学が独立行政法人になって以降、状況は一変する。単なる更新のための概算要求は認められなくなり、設備整備計画に則った新規の事業に付随する場合にしかネットワーク関係の要求は通らなくなった。さらにその場合にも、大学の自助努力(つまり、大学自身が身銭を切って或る程度の整備を進めているか?ということ)の実績が問われることとなった。

ところが、既に「上下水道化してしまったネットワーク」に対しては、日本人独特の「水と空気はタダ」という意識が働いてしまうのか、学内からの応援の声がまだまだ低いというのが現状である。

学内からの援助がないと、ネットワークが更新できず、やがて保守部品が無くなって機器の修理ができなくなり、現状の機能を維持することすらできなくなる。そして最終的にはキャンパス単位で、あるいは最悪の場合、全学でネットワークが完全に停止してしまうだろう。(近隣の某大学ではすでにそれに近い状況に陥っていると噂に聞いている。)

幸い、次期の更新には学内からの援助が期待されると聞く。しかし上に述べた理由により、更新は、賽の河原の石積みのように未来永劫続けていかなければならない運命にある。しかも運の悪いことに、ネットワーク機器を初めとするコンピューター関連機器の賞味期限は短く、一般の機器よりも短い周期で更新を続けていかななくてはならないのである。そのため、今後もネットワークの更新の必要性をご理解頂き、継続的に援助を続けて頂きたい旨を学内の皆様に切にお願いして、拙文を終えさせて頂くことにする。